

中学校における学級づくりの過程に関する研究
—授業内容・方法と生徒同士の人間関係の関連性に焦点をあてた
事例の分析と生徒同士の人間関係づくりのための実践方策の案出—

専攻 教育実践高度化専攻
コース 心の教育実践コース
学籍番号 P10039G
氏名 黒田 一真

1. 問題の所在

佐藤（2006）は「学びの共同体」として、授業の中で小グループによる協同的な学びを取り入れ、話し合う授業を通して、学校を「子どもが学び育ち合う場所としての学校、教師が専門家として学び成長し合う場所としての学校、親や市民が学校の教育活動に参加して互いに学び合う場所としての学校」というような学校改革を提唱した。「学びの共同体」では、個々人が持っている能力、資源を学級、グループに持ち寄り、他者との相互作用過程を通して、新たな「知」を生成する、学びを深め高めていくことを基盤としている。

いわば、授業と生徒同士の人間関係、相互作用が根本となっているのではないであろうか。本研究において、実習校はこの「学びの共同体」を実践している学校である。授業と生徒の人間関係の特徴として、山中（2009）は、「教室が学習活動の場であることは言うまでもない。したがって、教室で児童・生徒が関係を形成・維持する過程を日常の学習活動と切り離して考えることはできず、両者は密接不可分の関係にあること、しかしながら、両者の関連性は、これまであまり考慮されているようには思われない。学級での一日をやや大雑把にとらえれば、（教師からの意図的な）課題の提示（および不可測の課題の出現）とそれへの反応というパターンの連続であるように思われる」といった諸点によって特徴

づけられると述べている。

このような特徴をふまえ、本研究では、一つの学級を対象に、教員の授業内容・方法と生徒同士の人間関係づくりをとらえることを目的とした。そして、それらの事例分析に基づき実践方策を案出し、実践を試みた。

2. 中学校における授業内容・方法と生徒が形成する人間関係の実態

2-1. 事例分析の方法

(1) 観察

週1日の頻度で対象校に行き、対象学級での担任教師、個々の教員の授業内容・方法、生徒同士の人間関係を詳細に記録した。

それらの観察記録を基に、個々の教員の授業内容・方法について整理を行い、同時に生徒同士の人間関係の変容について事例分析を行った。

(2) 面接

筆者が、担任教師に2回にわたって半構造化面接を実施した。担任教師への面接項目は、①現在の学級の現状について、②担任教師の学級経営に対する考え方について、③その他（配属学級での現時点の課題）の3つの内容について、順に質問した。

(3) 集団討議

筆者の事例分析を基に、筆者が案出した実践方策について、筆者と大学院教員、学年団の教員（4名）の間で、よりよい「学びの共同体」の構築に向けた授業内容・方法及び生徒

同士の人間関係づくりに関する議論を行った。

2-2. 結果と考察

事例分析に基づき、「学びの共同体」を志向する上で、把握された教員の授業内容・方法と生徒同士の人間関係づくりに関する論点を以下に示す。

①グループ編成のあり方

②他者理解（顕現化する個人差の理解）のもたらし方

③相互依存的課題設定のあり方

ここでの相互依存的課題について、山中（2010）は「一人ひとりが相互に協力しあわなければ解決できないような課題、一人ひとりの行動が全体の課題遂行に反映するような課題」と述べている。

3. 生徒同士の人間関係づくりを促進する授業の構築

事例分析の結果から得られた論点を基に、それらの論点を含めた授業実践の具体を案出し、実践を試みた。

3-1. 実践の具体

【グループ編成のあり方について】

グループの固定化、さらにメンバーを自由に選択できる活動において、普段から一緒にいるメンバーを交流相手として選択してしまうという場面が、多々見受けられた。そこで、普段交流しない生徒同士を交流させる機会を高めるため、誕生日の日にち順にグループ編成した。

【他者理解（顕現化する個人差の理解）のもたらし方について】

本研究では「一筆書き」という教科書に記載されていない単元を取り扱う。誰もがすぐには返答できない課題であることを実感させる。それによって、顕現化している能力差（固定化している個人差）を払拭し、対等性をいくらか回復できるのではないかと考える。

【相互依存的課題設定のあり方について】

全員に発表を義務づけることで課題への関与を高めるとともに、それぞれのグループの生徒に役割を与え、一人ひとりが与えられた役割を遂行し、協力することで課題解決へと繋げるようにした。

3-2. 授業実践の結果と考察

グループ編成の工夫により、今まで交流している姿が見受けられなかった生徒同士が交流している姿が見受けられた。一方で、他者理解のもたらし方、相互依存的課題については、日々の積み重ね、さらにはこれから創意工夫を加えることが必要である。

4. 総合的考察

生徒の学校生活の8割は授業である。そうであるなら、授業を通して学級経営、人間関係形成を行っているといっても過言ではない。教科担任制である中学校において、個々の学級で多くの教員が授業を展開している。そのことをふまえると、学年団の横の繋がり、学校内における縦のつながりを密にすることで、共通理解、情報共有を生み、生徒理解を深め、やがては学級経営へと繋がると考えられる。

5. 今後の課題

筆者は、研究を通して対象学級に密接に関与したと考えられる。すなわち、学級づくりの過程においていくらかの影響を及ぼしていることが考えられる。そうであるなら、筆者の学級における行為を言語化し、筆者の行為が及ぼし得た可能性について、吟味することが必要となるであろう。

中学校における学級づくりの過程に関する緻密な分析は、それほど多くない。今後、同様の研究について、学校現場との協働により、遂行していくことが求められるであろう。筆者自身も教育現場に出て、一人の実践家として学校教育に貢献していきたい。

修学指導教員 新井 肇
指導教員 山中 一英